

## 視覚障害者の作品集より 黒岩剛仁

四月に入った頃から、右目の不調に悩まされている。原因は明らかで、コロナ禍による在宅勤務が一年を越え、その間ずっと昼間はパソコンと睨めっこしているのがいけないのだと思う。先週、眼球に注射を打って貰ったのだが、まあ、気長に付き合っていくことになりそうである。

そんな時あたかも、日本視覚障害者団体連合より、第四七回全国視覚障害者文芸大会の選者依頼が届いた。きちんと記録を整理していないのだが、選者を務めるのは今年で十回目くらいだろうか。選者に加えて頂いた当初は、佐佐木幸綱先生、池田はるみさんとの三人体制だった。現在は、幸綱先生が頼綱君に代わっている。毎年、感性の鋭い応募作に刺激を受けて来たが、目の不調を経験した今回は例年とは異なる想いで選をする事になりそうだ。

参考までに、昨年の作品集から何首か紹介したい。

・押し入れの整理に出でし古帽子かすかに君の若き日句う

田中 孝

・この酷暑戻りの遅き子を案じ全身耳に気配待ちをり

石岡ヒロ子

・友の声そろいホストの進行の居ながらにして会議の開く

埜村 和美

私が特選に選んだ三首である。一首目、出てきた古帽子の形や色ではなく、匂いによつて「君の若き日」を思い出している。二首目も、帰ってくる子の姿を目で確認することができないので、全身を耳のようにしてひたすら「気配」を待っているのだ。三首目はリモートでの会議を詠んでいるのだろうが、パソコン画面に映る友たちの姿ではなく声によつて揃ったことを確認している。いずれも、目が不自由であるゆえの感覚的確に表現されていると言えよう。

・妻と子の若やぐ春の装いに開きておりぬ心の眼まなこ 久保田嘉博  
・ウイルスを見えない敵と言うけれど見えない者には特別ではない  
小林 修

私が秀作に選んだうちの二首。前者を頼綱君が、後者を池田さんが特選に選んでいた。一首目の妻と子は、夫であり父である作者に分かるように、「このワンピース、花柄なのよ」などと春の装いを口々に言い表してくれたのだろうか、それを心眼でしっかりと受け止めた作者。二首目は、見えないことへのこだわりのようなものささ感させる強い表現となっている。

・押し入れに布団直してホッとする次は写真にお茶と水運ぶ  
妙中 康子  
・空間を記憶たどつて構築す盲人全てアーティストだ  
山中 淳喜

私が佳作に選んだうちの二首である。前者を頼綱君が、後者を池田さんが特選に選んでいたように、ともにいい歌だと思う。

さて、今年もどんな歌と出会えるか、心して楽しみに選者を務めることとしよう。